

外陣講義文書

「第1講義文書」
(0 = 0 プロベイショナー)

第6章

個人的神殿の作成

- | | |
|-------------|-------------|
| 1 | 神殿とは何か |
| 2 | 歴史上の神殿 |
| 3 | 魔術結社の神殿 |
| 4 | アストラルの神殿 |
| 5 | 神殿作業 |
| 6 | 個人的神殿の作成法 |
| 7 | 個人的神殿の聖別法 |
| 8 | 個人的神殿の聖別解除法 |
| 9 | ノタリコン |
| 課題瞑想：薔薇と十字架 | |

**THE OFFICIAL ORGAN
OF
I::O::S::**

**PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::**

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

知識講座

1 神殿とは何か

一般の日本人にとって「神殿」とは耳慣れない言葉であろう。日本語の「神殿」は、神社の本殿を指す。しかし、今日では翻訳文学などで外国の神を祭る聖域を神殿と訳しているのも、そちらの方がより一般的である。

神話学の分類によれば、未発達な多神論宗教において神殿は神の住まう場所、すなわち「居住神殿」である。しかし、神話体系の宇宙論が成熟し、神の住まう異界と人間の住む地上界の区分が明確になると、祭礼等の特別な機会にのみ神的存在が臨在する場を神殿が提供する。それが「臨在神殿」である。⁽¹⁾

臨在神殿の典型例をユダヤ教に見ることができる。放浪時代の幕屋とエルサレムの第1、第2神殿は、神の臨在する座標であった。

さて、我々、儀式魔術を行う者にとって「神殿」は、特別の意味を持つ。

多くの魔術集団は専用の儀式場を確保し、そこを浄化、聖別して神殿として用いている。それは魔術師たちが儀式を行う場であると同時に、かれらの力と形が上位世界へ投射される基盤となるものだ。しかし、真に重要なのはこの物質の神殿ではない。我が魔術結社 I : O : S : では、物質神殿の建造に先駆け、アストラル神殿を構築した。それは、一同に介する機会の少ない団員たちが、超越魔術の作業を行う場でもある。その作業を「神殿建立」と言う。

ところで、^{テンプル}神殿という言葉から我々は何を連想するだろうか。魔術師なら、聖別された儀式場だと考えるに違いない。まだ、業界用語に詳しくない者は、怪しげな宗教の寺院を思い浮かべるかもしれない。

このテンプルという言葉は、ラテン語の *TEMPLUM* を語源とする。古代ローマのト占官は、鳥占いに用いた聖別された空間をテンブルムと呼んでいた。身を清め法衣を纏った術師は、職務の杖（リトゥス）でもって、開けた地面に矩形の線を引き《^{テンブルム・インテリオーレ}地上の神殿》を聖別し、空を見上げて視覚化の技術により同じ矩形の空間を見て《^{テンブルム・スプレリオーレ}虚空の神殿》を設定する。このスクリーンの中に現れる形象を以て吉凶を判断するのが当時流行の神占術であった。それが転化して、聖域、神殿を意味するようになったのである。⁽²⁾

ヴァローによると城砦（アルクス）においてテンブルムを設定する古式があると言う。しかも、このテンブルムを地上に設けるにあたり、樹木が境界線として設けられた。それは儀式により森のなかの聖なる場所ネモスとなる。

「*Templa tescaque me ita sunt, quoad ego ea rite lingua nuncupavero.*

Olla vera arboris quinquaginta est, quam me sentio dixisse, templum tescumque me esto in sinistram.

Olla vera arboris quinquaginta est, quam me sentio dixisse, templum tescumque me esto in dextram.

Inter ea conregione conspicio cortumione, utique ea rite dixisse me sensi.」

（神殿と荒地は余が敬虔なる口をもて、それを名付くところまで、かくは余のものなるべし。かの古き樹木、余の既に述べしなれどその類を問わず、汝、神殿と荒地を左手の彼方に定めよ。かの古き樹木、余の既に述べしなれどその類を問わず、汝、神殿と荒地を右手の彼方に定めよ。これらが点の間に、指示と観察と解釈のために、余がいとも正しく作法に叶うて申し述べしこ

(1) R.E.クレメンツ『旧約聖書における神の臨在思想』教文館、1982年、147-149頁。

(2) オットー・フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』せりか書房、1978年、136-137頁。

と確実なり。) (3)

ローマにおける集会所 (comitium) (コミティウムは、ローマ国民議会に発展する。英語の委員会 (committee) の語源である。) は、このテンブルムから開始された。コミティウムは方形をなし、四辺は天の四つの領域に向けて位置づけられた。プルタルコスのローマ建国に関する言及によれば、本来のコミティウムはムンドゥス (宇宙、ギリシャ語のコスモスと同義語) と呼ばれていた。双子王ロムルスは、建国にあたりエトルリアの魔術師を迎えて王都を聖別した。コミティウムの周りには円形の溝が掘られ、その溝の中には供物や地方から献納された土が埋められた。この溝もムンドゥスと呼ばれたのである。このムンドゥスを中心に、一頭の牡牛が都市の壁に沿って犁を引く。門を造る場所においては、犁を外し、線にとぎれ目が入るようにした。これにより、門以外の壁全体が魔術的に神聖とされた。

つまり、現代の魔女たちがサークル・キャストイングを行う方法は、エトルリアの魔術の伝統なのである。

さて、西欧では、多くは丘が聖地とされてきた。神殿の意味の一つには、卓越した視界を得る特別に開けた場所という解釈もある。それは、しばしば、丘の頂上だった。何故なら、地上を鳥瞰できる高所は、天界にも近い場所だからだ。

当然のことながら、神殿の第1の機能は神性、神格の仮の宿りを作ることにある。そのため神殿の位置は崇拜する神、或いは原理によって代わる。ミトラス神の信者たちは地下神殿を造営した。ドルイド教徒は、森に入った。海神の神殿は、海に面して建てられた。この調子で列挙すればキリがないであろう。

それでは、我々の魔術的伝統でのテンブルムとは何だろうか。それは失われたイェルサレムの神殿に他ならない。歴史上の2度に渡る神殿破壊により、地上のイェルサレムの神殿は失われた。しかし、カバラの伝統の中では、秘密の祭儀の中に儀式の神殿が継承されている。カバリストたちは聖化した意識 (ルアクとネシェマー) の中に神殿を作り上げる技法を確立した。魔術的用語で解説すると、魔術師の集合意識がアストラル・ライトの中に《上位の神殿》を形成するのである。

正しくパス・ワードを知るものは、このアストラル神殿に出入りでき、それを建設した秘教集団が蓄積した魔術的な「力」と「形」を自在に利用できる。むしろ、その際に個人の力量と位階に応じた知識と実践の差が出るのは仕方がない。しかし、団の神殿の利用は、魔術が個人レベルから集団による高度なレベルに飛躍できるか否かの別れ目になるであろう。

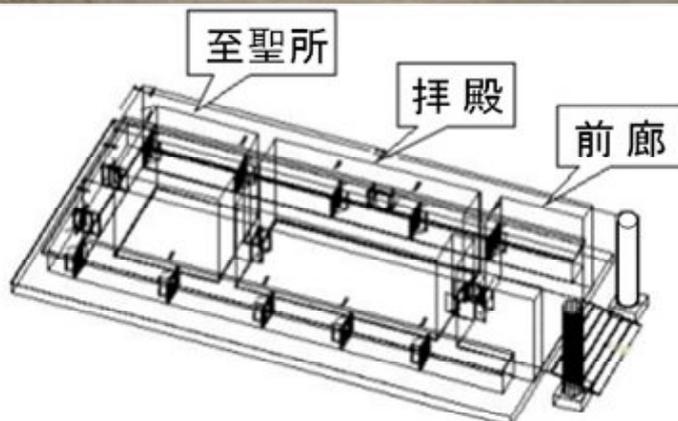
むしろ、個人的目的で自分専用の神殿を作ることも可能である。

(3) M. TERENTI VARRONIS, *DE LINGUA LATINA LIBER VII* <http://www.thelatinlibrary.com/varro.ll7.html>
ヴァロー (Marcus Terentius Varro (116-27 BC)) は、1世紀の代表的な著述家であり、ラテン語の書物25冊を含む620冊の著作を発表した。

2 歴史上の神殿

イェルサレムの神殿は、歴史に名高いソロモン王が初めて建立した。それまでは、砂漠をさすらう民であったユダヤ人は、幕屋という移動式のテントの中に神との契約の印である《契約の櫃》を安置していた。この櫃こそ十戒を刻んだ2枚の石板とモーセ直筆の『聖書』が収められた「あかしの櫃」であり、イスラエルの信仰の象徴であった。櫃を収める神殿の建設は、最初ダビデ王が神に願い出たが、その生涯にあまりにも多くの血を流したため、神はこれを良しとされず、息子のソロモンが引き継ぐこととなった。それがイェルサレムのメギドの丘（正確な場所は不明）に建立された第1神殿、またの名をソロモン王の神殿である。この神殿は、その全体を「神の宮」（בֵּית לַיהוָה ベイト ル・ヤーウエ）又は「聖なる宮」（בֵּית מִקְדָּשׁ בֵּית ハ・ミクダシュ）と呼ばれた。正面外側に「青銅の海」と名付けられ、十二頭の青銅の雄牛に支えられた巨大な洗水盤と、燔祭の祭壇（犠牲の祭壇）があり、西に面した入り口の左右にはヤキンとボアズという名の2本の青銅の柱がそびえていた。⁽⁴⁾

柱の間を通り過ぎると、前廊、そして「拝殿」（הֵיכָל ヘカール）に入り、薫香の祭壇と供えパンの台の位置から、ケルビムの像に守られ契約の櫃が安置されている至聖所（הַקֹּדֶשׁ הַקָּדוֹשׁ ハ・カデシム）の仕切りを仰ぎ見ることができた。一説によると、至聖所の上部は仕切板が開放され、拝殿から仰ぎ見ることができた。この部分を「奥聖所」（דְּבִיר דビール）という。⁽⁵⁾



この神殿こそ、西欧の魔術的伝統総ての基礎であり、真の神殿である。

(4) このソロモン神殿を含む中東の古代の神殿は、オリエンテーション、すなわち日の出の方角に向かって参内した。従って、神殿の参道は西から東に向かい直線的に作られたビザンティン教会、カトリック教会はともに祭壇を東の奥にしつらえ、他の方位も宇宙の東西南北に一致させている（ボルノウ前掲書、61-62、138頁。）。

(5) Michael Chyutin, *Architecture and Utopia in the Temple Era*, London : T&T Clark, 2006, p.66.

バビロン捕囚⁽⁶⁾により、神殿が焼き壊されると、「契約の櫃」(חֲבֻטֵי הַבְּרִית アロン ハ・ブリット)も行方不明となった。そのため「失われた櫃」という呼び名で知られている。



このバビロン捕囚は民族のあり方を大きく変えることになった。「万軍の主は公平の捕囚となり、・・・」⁽⁷⁾バビロン捕囚の影響は顕著であり、捕囚から開放されたとき、荒野の祖国に戻ることを拒絶し生活基盤のあるバビロニアに残る者、パレスチナに戻り祖国を再建する者の両者に分かれた。離散(ディアスポラ⁽⁸⁾)の常態化である。そのため、双方のユダヤ人は思想を整合する必要があった。⁽⁹⁾その帰結として、離散そのものがユダヤ人に課された役割であるという思想が定着した。⁽¹⁰⁾

第2神殿は、ペルシャ王の許可により、紀元前5世紀に完成した。その規模は第1神殿と同大であったと言われている。しかし、神とイスラエルの契約の直接のあかしである十戒の石板は、契約の櫃とともに行方不明であり、至聖所の中は空であった。

新約聖書において悪名高きヘロデ王が、紀元前19年に第2神殿を改修し、本殿をそのままに、異邦人の庭と呼ばれる外庭と、巨大な外壁を建造した。自らも異邦人(アム・ハ・アレツ)であったヘロデ王は、神殿の外壁と内庭の間には異邦人も入れる場所を付加したのである。⁽¹¹⁾

しかし、ローマの支配を受け入れたイスラエルは、ローマ帝国の収奪と宗教弾圧に耐えかねて

(6) ケラーは簡明に要約した。「アッシリアの滅亡後に興隆したカルデア人の王国の支配者であるバビロニアの王ネブカドネザルの下に、ユダは荒廃しエルサレムは征服され破壊された。ソロモンの神殿は灰燼に帰した。二回の引き続き大規模な移動を強制され、民族の栄華は追放され、バビロン捕囚となった。一部の人々はエジプトに逃亡することに成功した。畑やぶどう園を耕していたごく少数の人々がこの地に残った。しかし、ユダに外国人は導入されなかった。」

なお、サマリア占領は紀元前722年、ユダ王国滅亡は紀元前586年である。(ウエルネル・ケラー『ディアスポラ 上』、山本書店、1982年、15頁)。

(7) JESAIA CAP.5.16 *Hebrew Old Testament* London: The British and Foreign Bible Society, p.638.

(8) ギリシャ語のディアスポラ(διασπορά)とは、前置詞「分散する」(διά)と動詞「種を蒔く」(σπορά)を組み合わせた言葉である。当初は単に「移住」や「植民」という意味であったが、ユダヤ人の悲惨な異境生活がその典型として知られるようになり、より冷酷で残忍なニュアンスを含むようになった(ロビン・コーエン『グローバル・ディアスポラ』明石書店、2001年、11頁。)

(9) Robert Gordis, *The Dynamics of Judaism: A Study in Jewish Law*, Indiana: Indiana University Press, 1990, p.57.

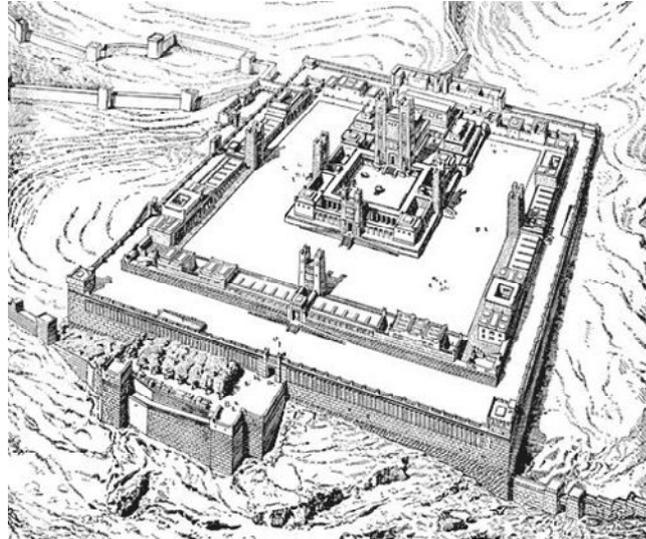
(10) 「主はあなたがたを国々に散らされる(יִפְּרֹד)であろう。そして、主があなたがたを追いやられる国民(גוֹיִם)のうちに、あなたがたの残る者の数は少ないであろう。」(申命記4章27)

(DEUTERONOMIUM CAP.4.27 "*Hebrew Old Testament*") London: The British and Foreign Bible Society, p.283).

(11) キリスト教系の文書には「ヘロデの神殿」を「第3神殿」と呼称する場合もあるが、ユダヤ教聖書学の観点からは、ヘロデは第2神殿を改築しただけである。従って、時に「ヘロデの神殿」とも呼ばれる。

都合3回の反乱を起こし、⁽¹²⁾ 最終的には首都エルサレムとパレスチナの領土を失う。⁽¹³⁾

前述したようにエルサレムがユダヤ人国家の手にあった時期でさえ、ユダヤ人は外国に寄留する離散の民と、イスラエルの民という2重構造を余儀なくされ、国家を超えた複雑なアイデンティティーを維持してきた。⁽¹⁴⁾ ハドリアヌス帝によるユダヤ国家破却令以降は、全ユダヤ人が離散の運命を共有するに至った。



そして、最後の神殿は、1世紀にローマ帝国のティトゥス軍団に焼かれ、再建されることは無かった。今でもエルサレムに残る「嘆きの壁」が焼け残った外壁の一部だという信仰がある。世界中のユダヤ人たちには、第1神殿と第2神殿の破壊を思い出すために、家の壁の一角だけ塗装を省略したり、未完成の部分を残す「ゼッカー・ラ・ハーバン」と呼ばれる習慣を維持している。また、ユダヤ暦の第9月アブには、第1神殿と第2神殿の破壊を思い出すことが習慣とされている。この儀礼的な嘆きは、ルリア派のカバラによれば、人の嘆きの思いは神聖なる嘆きの照応をもたらすという。⁽¹⁵⁾

第3神殿については、宗教及び宗派により見解が異なる。

いわゆる「ユリアヌス帝のローマ第3神殿」は、キリスト教徒の勃興に反感を抱くローマ皇帝ユリアヌスが、362年にパレスティナ在住のユダヤ人にエルサレムに神殿を再建することを許可したことに始まる。

しかし、皇帝ユリアヌスの意図が帝国全土に古代神の復興を図るのみならず、同時に自身の神

(12) M. シュルテン 『ユダヤ戦記』とローマ帝国 『ヨセフとユダヤ戦争』 山本書店、1985年、77-91頁。

(13) 「それは135年頃陥とされた。・・・バル・コホバとその部下全員が死んだ。・・・ハドリアヌスは今やユダヤの中に異教の都市を建設する彼の計画を実行することが可能になった。神殿の丘から昔の聖所を思い出させるすべてのものを一掃するため、鍬が動いた。そのあとに、ローマの植民都市アエリア・カピトーナが建設され、・・・外国人が植民した。・・・そしてユダヤ人たちがこのアエリア・カピトーナに入ることは死刑をもって禁じられた。ユダヤという名称さえ抹消された。それ以後この土地は、かつて海沿いの「ペリシテ人の地」に住み、イスラエルの敵であった民族の名にちなんで、パレスチナと呼ばれるようになった。ローマの命令により、これ以後いかなるところにも「ユダヤ人の土地」が存在してはならなかった。・・・彼はユダヤ人の精神を根絶やしにすることを欲し、異教を強要した。宗教迫害をもって追い打ちをかけたのである。・・・皇帝の命令によりユダヤの律法と伝承に従うことは死刑をもって禁止された。割礼も、安息日を祝うことも、トーラーの教えも許されなかった。その他あらゆるユダヤの習慣も同様に刑罰の対象となった。」(ケラー、前掲書、102-104頁。)

(14) 左近義慈・南部泰孝 『聖書時代の生活Ⅱ』 創元社、1982年、154頁。

(15) Moshe Idel, *Kabbalah : New perspectives*, New Haven : Yale University Press, 1988, p.197.

格化 (apotheosis)⁽¹⁶⁾ を企図したため、キリスト教徒の巻き返しもあり、歴史のなかに忘却されていった。

ディアスポラのユダヤ人にとって「第3神殿」とは、約束の地に帰還する際に再建されるユダヤ人の神殿である。正当派ユダヤ教及び保守派ユダヤ教の教義には、第3神殿の再建を意味する記述がある。⁽¹⁷⁾

ローマ帝国軍による本国の消滅は、ユダヤ人に危機の時代をもたらした。エルサレム神殿の完全な消滅は、ユダヤ民族の精神的支柱が祭祀階級のレビ族から、⁽¹⁸⁾ 律法教師に移行することを意味した。新たな民族の精神的指導者たちは、危機の時代に対応した宗教解釈⁽¹⁹⁾ 及び迫害時の免責事項⁽²⁰⁾ について意志統一を迫られた。

神殿を「契約の筐」諸共に失ったユダヤ人は、神の臨在はメシアが最終的に来臨するまで離散のユダヤ人とともにあるという「シェキナーの流謫」理論を発展させた。⁽²¹⁾ また、メシア来臨に備えて心の中に「天界の神殿」を築き、⁽²²⁾ シェキナーを帰還させるという祈りも行われた。⁽²³⁾ ユダヤ人の宗教家はこぞって民族の宗教的、倫理的努力を説いた。⁽²⁴⁾

しかし、結果として宗教的なイェルサレムの回復は達成されず、シオニズム運動と第2次世界大戦のホロコーストの衝撃により、政治的な回復、イスラエル共和国の建国が先行した。

従って、現在もユダヤ人の「第3神殿」は、天界にのみ存在する。

(16) キリスト教化される前のローマ帝国及び属領の神殿には、皇帝の神像も飾られた。ユリアヌスは多神教の信仰を復活させるため、この慣習も再現しようとした。

(17) http://en.wikipedia.org/wiki/Temple_in_Jerusalem

(18) フラティウス・ヨセフス『アピオンへの反論』 山本書店、1977年、216頁。

(19) 「革命（バル・コホバの乱）の失敗による悲惨な離散は、神に背いた罪の報いであり、罪が許されるときには再びカナンに復することができると、彼らは確信していたのである。」志村武『シオニズム・ユダヤ教と仏教』人間の科学社、1972年、98頁。)

(20) ローマによる追放後、ルッダにおいて秘密裏に開かれたラビ会議における迫害時の免責事項は、次のように決着した。「長く激しい議論の末、ラビたちは妥協点に到達した。すなわち、強迫の上での殉教の死を避けるために、律法の遵守は中断することができる。ただし、偶像崇拜、姦淫、及び殺害は例外とする、というものである。」(ケラー、前掲書、104頁。)

(21) シュバルツは、『タルムード』の引用として「シェキナーの流謫」(the Exile of the Shekinah)の神話を解説する。バビロン捕囚を預言した『エレミア書』を典拠に、ルーリアの弟子が主の宮居の破壊された後に佇む黒衣の寡婦のすがたを借りた神の臨在の霊(シェキナー)を幻視した様子を描写する。そして、ローマによる追放の後も、シェキナーの流謫は続いており、破壊された神殿を後にして、メシアが来臨するまで離散のユダヤ人とともに留まると説明した(Schwartz, Howard *Gabriel's Palace* Oxford: Oxford University Press, 1993, pp.18f.)。

(22) Victor Aptowitzer, "The Celestial Temple as Viewed in the Aggadah" in *BINAH Vol2*, New York : Praeger publishers, 1989, p.II.1.2.f.

(23) コルバンは、『エゼキエル書』を引用しつつ、「形相の神殿」(Imago templi)のシェキナーの帰還について記述する。しかし、神殿の修復は現実空間では行われない。シェキナーは流謫の民とともにあり、かれらの霊的神殿のもとに帰還する(Henry Corbin, *Temple and Contemplation* London: ISLAMIC PUBLICATIONS, 1986, pp.284-287.)。

(24) 「汝の言及せるこの木とは何か?・・・木は何によって花を咲かせるのか。イスラエルの民によってである。彼らが善良にして義を守るならば、シェキナーが彼らのもとに住まうのだ。」(Trans. by Aryeh Kaplan, *The Bahir ILLUMINATION*, York Beach: Samuel Weiser, 1989, p.45(English) and p.220(Hebrew).)。

3 魔術結社の神殿

我々の用いる神殿の元型が、ソロモン王の神殿であるのは言うまでもない。メイソンの伝統では、ソロモンの神殿の建立に拘わった三人の賢者、即ちソロモン王、ヒラム王、棟梁ヒラム（アビフ）こそメイソンの最初の三大首領であり、ロッジを支える三本の柱、「慈悲」、「峻厳」、「美」を象徴する者だと語っている。

それでは、我々の神殿は何を意味するのだろうか。

《黄金の夜明け》団は、英国薔薇十字協会（S. R. I. A.）やその他のメイソン系団体から引き継いだ、華麗な儀式場（神殿）を構築した。そこには、2本の柱があり、黒い祭壇があり、その他の小道具が蒼古のソロモン王の神殿を象徴する場を形成していた。

地上の神殿の役目は、第1に魔術師たちが動く空間を仕切ることにより、儀式を適確に進行させることである。東西南北が設定され、小径を象徴する扉が置かれる。彼らはそれを目標に定められた（比較的小さな）空間を動く。

第2は、魔術師たちの想念を集中する焦点になることである。例え祭壇が合板の日曜大工で、部屋が畳の上に応急の安物カーペットを敷いただけでも、問題ではない。かれらは右の柱は輝く白銀で、左の柱が黒檀の、巨大な石造りの神殿を想起するだろう。アストラル幻視を呼び起こす、小道具なのである。

従って、地上の神殿はメイソン系の広間のように金をかけた華美な代物である必要はない。



あるメイソンロッジの風景

貧しいカバリストの集会では、小高い丘に集まり岩を祭壇に見立て、周囲を聖別して神殿を気付いた例もある。要は参加した魔術師たちに便利であれば良いのだ。むろん、限界のある人間の想像力を補佐するため派手な彩色や、鮮明な図版が必要な場合もあるだろう。

4 アストラルの神殿

先に地上の神殿が、想念を集中するための焦点になると説明した。それでは魔術師たちの集合した想念は何を造るのだろうか。これこそアストラルの神殿である。

アストラル神殿とは、地上の対応物の背後に構築される非物質の神殿である。その建築資材は、地上の祭壇や柱を構成する物質ではなく。我々が地上の神殿を目にし、想起する高次の神殿のイメージが重合して築きあげる。従って、十分に強い想念の所持者であれば一人でも自分の神殿を築くことができる。しかし、一般に、複数の魔術師が長い時間をかけて、または儀式の繰り返しの中でアストラル・ライトの中に固定した神殿のイメージを定着させるのが普通である。経験を積んだ魔術結社の神殿は、堅固な構築物として何千年も前から存在していたように見える。そして、その扉は団員以外のものには堅く閉ざされている。

ここでアストラル界と言わずにアストラル・ライトという単語を使ったのは、神智学で使う《アストラル界》とは違うからだ。かれらは細分化して物事を眺めるのが好きだ。「アストラル、メンタル、コーザル…」しかし、人間の精神機能の方はせいぜい数個の分類の方を好む。魔術では必要のないときは、上位世界を細かく分類しない。西欧では神学的宇宙構造論を構築するとき基底部の地上（物質）世界から、非人格神の領域である高次の世界までを四つに大分割した。しかも、それ以前には小宇宙（人間／^{アストラル}四大の世界）対大宇宙（星空より高次の世界／アティール界）のふたつに分けていた。それで星辰界という言葉に、地上世界より高次の全ての世界という含みで用いたのである。ここで言うアストラル・ライトは、イェツィラー界からアツィルト界までの総ての精妙な上位平面を含む概念である。従って、魔術師がアストラル界のみに拘泥して高次の世界に行けないという非難は、うわべを見て判断する半可通の台詞である。少なくとも《黄金の夜明け》魔術システムは、そのような低俗レベルのみで作用していない。

眩しい天使団の乱舞する形成世界の神殿の背後には、さらに高次の大天使が統括する創造世界の神殿があり、その背後には神が臨在する流出世界の神殿が存在する。大枠で考えても三つの上位神殿が存在することになる。或いは、十のセフィロト世界に対応する神殿。また400の複合世界の神殿群など、システムをどこに取るかによって様々な設計図がうまれてくる。神殿の線引きはひとつではないのである。

さて、結社として、ひとつのアストラル神殿を構成するときは、団員の総てが同じイメージを持つことが必要である。地上の神殿を対応させてアストラル神殿を築くのは、皆が同じイメージを持ち易いからだ。

しかし、地上の物理的対応物が無くても神殿は構築できる。もちろん、その神殿を団体に属するものたちが頻繁に使用した場合のみであるが。

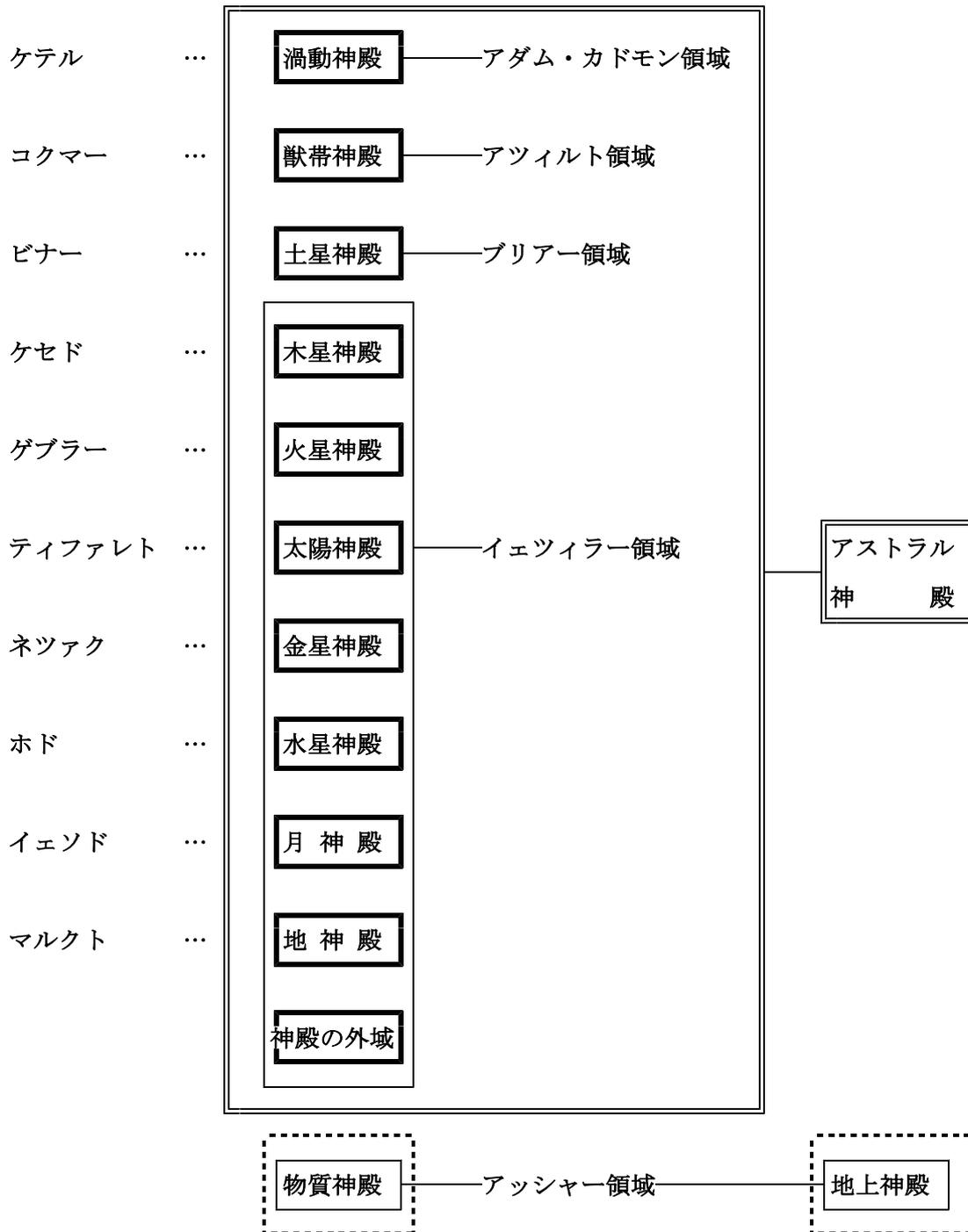
Wm. G. グレイの「聖盃の血盟」(SANGREAL SODALITY)では、神殿と類似した概念で、集団の内部に「聖盃城」を築く作業がある。「内なる城」を相当数の魂の同志が設計すれば、物理的に同席していなくても、その城を分かち合うことが可能だとし、グレイは城の基本設計、工事のやり方、作業の監督、入城の合言葉を規定している。かれの徹底した方法論は参考になる。

これは完全に地上に対応物を持たない神殿である。聖盃城にしる、天の教会にしる、我々の構築するソロモンの神殿や天界のイェルサレムにせよ、アストラル・ライトにおける力学は同じことだ。

要は結社の総員が、同じ神殿のイメージを共有し、同時に強くアストラル・ライトに投影することである。その意味で、団員が同時に実施するパズーキングの技法の変形とも言える。

それではアストラル神殿と総称される《上位の神殿群》は、どのように構成されるのだろうか、ここにひとつのモデルを紹介する。これはカバラ体系に立脚した配置であるので、これが万能の回答ではないことをあらかじめ断っておく。

アストラル神殿の構造図例



さて、この図では、アストラル神殿の個々の名前が惑星の名前を借りていることに気づいていただろう。これらは本来はセフィロト神殿であり、金星神殿はネツァク神殿と、火星神殿はゲブラー神殿と呼び代えても良い。本来はアッシャーの表象である惑星名を敢えてこの場で用いたのは、神殿が必ずしもセフィロトの、より正確に言うならば四界のそれぞれのアスペクトを示すものではないということだ。純粋なセフィロト神殿は、人間には掴みどころのない光と影の交差する領域である。それを人間が把握し、高次の存在と交流できる場に変換するため惑星象徴や、その他のイメージを付与するのである。従って、惑星神殿の内部は視覚化可能な造形で造られており、その象徴の彼方に真のセフィロト神殿が二重存在としてあると覚えておいて欲しい。

ここで具体的な神殿のイメージを示してみよう。

神殿の外域

魔術関係の著作では神殿の内部について詳しく書いた本はあっても、その周囲や建立された土地について詳しく述べたものは少ない。しかし、神殿は無から突然出現するものではない。地上の神殿は、具体的な建築手順があり、設計図の線引きに始まり、工具を持っての参加に続く作業があるので、その建立に参加した団員たちや、古参団員からその模様を聞かされた新参入者たちは理解しやすい。

だが、アストラル神殿は地上神殿とは違って、夢を見るように簡単に造れると勘違いしている節がある。アストラル・ライトに堅固で不動の座標を設定するためには、地上の神殿を建立するのと同様の作業を行わねばならない。そして、その作業を経ることにより神殿へ到達する道筋が造られるのである。

まず、あなたは神殿を建立する場所を設定しなくてはならない。どのような性質の神殿であるかによって場所は変わってくる。絶海の孤島なのか、砂漠のオアシスなのか、聖なる山の頂きなのか。

「聖盃の血盟」団を指導する魔術師ウィリアム・グレイは、かなり明確なヴィジョンを打ち出している。かれの内的神殿、「聖盃城」は絶海の孤島の上に建立される。

もし、単純な方が楽だと思えば、砂漠をお勧めする。エリファス・レヴィは『カバラの神秘』のなかで、砂漠の風景のなかに聳える「ソロモン神殿」を描写している。現代の我々の目で見るとあたかもモスクのようなもので時代考証も、ユダヤ様式に関する知識もなかったようだが、当時の中東に関するイメージを活写しており興味深い。

ただし、砂漠は海と同じで座標が定めにくい。絶海の孤島と同様に突然、神殿の土台となる周辺の建造物が現れてくるので注意してもらいたい。さらに、もうひとつ例をあげると英国のお家芸とも言えるマーリン魔術では、伝説の古城の過去の姿が導入される。ティンタジェル城の築城された場所は、細い地橋で内地と連絡する半島の先端部である。これなどはイメージの旅がやり安い見事な設定である。

これらの場合、必要なのは空間的或いは地理的な位置ではない。その場所に至る道しるべである。アストラル・ライトの低次領域は強烈なイメージのプールである。それを突き抜けて目標とする神殿に到達するためには、確固とした方向性が必要だ。途中に何か所か道標となる象徴を置いておくのもよし、道を造っておくのも良い。しかし、最終到着地のイメージが固まらなくては旅は終わらない。地下鉄に乗って電車を降りたら直ぐ目の前に友人の家の玄関とはいかないものだ。

従って、これまで述べた幾つかの例を参考にして、神殿の建立場所を細部にいたるまで検討し、できれば図解して視覚的イメージとして確立しておくことが必要だ。

アストラル神殿

色々な魔術の本では、神殿の内部を詳細に扱っているものがあるので、しばしば誤解されるが、アストラル神殿についても外側から作っていかねばならない。神殿の外域の設定が終わったら、その上に聖域を設定する。通常は四角形の壁をつくる。石や煉瓦の壁が普通であるが、古代アルピオンやケルトの城塞風に丸田を組んだ矢来を築いても良い。ストーンヘンジのような単純な巨石建造物でもその周囲に円形の溝が掘ってある。これは、神殿の外域と神殿そのものを区別し、神殿に溢れる神の力を封印する結界である。ただし、壁には必ず門を開くこと。

次に神殿に至る参道を作る。そして、参道の終点に神殿の本殿を建てるのである。これより先は、結社の象徴体系を暴露することになるので詳しくは語れない。I∴O∴S∴の場合、ソロモン神殿を模した宏壮な神殿建造物が、マルクト神殿として控えていると語るだけで止めておこう。マルクト神殿、すなわちアストラル神殿の最下層にある神殿は、歴史上の神殿や、神話の神殿を模して作られることが多い。それが地上のイメージの世界と密接な関係をもっているからだ。

5 神殿作業

これまでは神殿の複合構造を概観した訳だが、当然の疑問として、実際の魔術団体が神殿でどんな作業を行うのか興味があるだろう。《黄金の夜明け》団では、アストラル神殿についての明瞭な記述はない。かれらは地上神殿にアストラル神殿を投影するという技法を用い、観念論的になりがちなこの論争に終止符を打った。その方法は、「可視の場」と「不可視の場」というふたつの現実の使い分けである。《黄金の夜明け》団の儀式では、総ての司官はエジプト神の形象で上位のアストラル的実質を肩にかついでいた。例えば、ハイエロファントはオシリスの神格を纏い、ヘゲモンはトゥマエースト、ハイエールスはホルスという風に役割が決まっていた。これを「可視の場」と言う。そして、その上で、司官たちが配置されない場所にも「不可視の場」として、神々の姿が配置された。これらの魔術的イメージは、ハイエロファント以下の司官たちが、儀式に先立って念入りに構築するのである。

その結果、《黄金の夜明け》団の儀式場は、アストラル的視覚を持つ者には、エジプト神の横行する巨大な上位神殿を地上に召喚した形となった。従って、正確に《黄金の夜明け》団の儀式を執行すれば、壮麗な神々のドラマが展開することになる。

別の例としては、「内光協会」の神殿があげられる。ダイアン・フォーチュンが指導する魔術師の集団はロンドンの一隅に家を借り、そこで共同生活をしていた。かれらの発想は極端であり、家の外に出るのは生活費を稼ぐ等の止むに止まれぬ地上的な理由であり、天国の結界である共同体を出るときは、家の扉に「解放の五芒星」（《黄金の夜明け》団の「火の召喚の五芒星」と同じ。）を描いて外に出て、「閉鎖の五芒星」（同上、「地の召喚の五芒星」と同じ。）を描いて封印したと言う。かれらはまさしく無垢な魔術師の天国に住んでいたと言える。⁽²⁵⁾

そのかれらの儀式は、地上の神殿を基盤にアストラル・ライトに神殿を構築し、活動するものであった。第2次世界大戦が勃発し、流石に団員たちが本部に集まれなくなったとき、フォーチュンはひとつの決断をした。「地上の神殿作業なしで、アストラル神殿を開こう。」彼女は団員たちに儀式の執行日時を告げ、直接アストラル神殿にアクセスするように宣言した。この方法はうまくいった。

アストラル神殿に直接入る方法は、広範囲に構成員が広がった現代の魔術団体でも使われている。マリアン・グリーンの主催する「グリーン・サークル」では、毎週曜日と時間を決めて、そのロンドン時間に合わせて世界中でアストラル神殿に飛翔していた。むろん、ロンドンが夜なら9時間の時差のある日本は、夜明け前の闇の最も濃い時間帯である。この方法には利点と同時に欠点がある。

ともあれ、強固に建設されたアストラル神殿は、その団体の財産である。当然のことであるが、正式に認可され、秘儀参入を受けた団員以外は、団の神殿へのアクセスの仕方も、神殿の扉を開く当日のパス・ワードも知らない。しかし、強力な魔術結社の霊的財宝とも言える神殿を求めて、不法な探索をなす輩も後を絶たない。

I ∴ O ∴ S ∴ では、神殿参入はニオファイト以上の団員の権利であり、義務である。諸君はそれまでに必要な学習を終えて自らの力と技を磨いておいて欲しい。

(25) Charles Fielding & Carr Collins, *The Story of Dion Fortune*, Loughborough : Thoth Publications, 1998, p.100.

実践講座

6 個人的神殿の作成法

裕福な魔術結社であれば儀式専用の部屋を用意することができるだろう。事実、多くの海外メイソン系結社はGのマークを刻んだ独自の儀式場を含むメイソン・ホールを建設し、管理している。しかし、この土地の高価な日本では魔術儀式専用の家はおろか、専従の部屋を借りるのも難しいであろう。従って、儀式場となる部屋は普段はそれ以外の目的で使用されていると覚悟しなくてはならない。事実、小さな魔術結社が近傍のメイソン・ホールを一時的に借用して、儀式を行うのは欧米ではごく普通に見られる光景である。儀式に必要な柱や祭壇などの大道具は、ホールの予備室を借りて保管しておいてもらうのだ。

だが、これも日本の実情には合わないようだ。

おおくの魔術結社は幹部の自宅を解放して儀式を執行するか、小さなレンタル・スペースを借りて行うかの二者択一を迫られている。

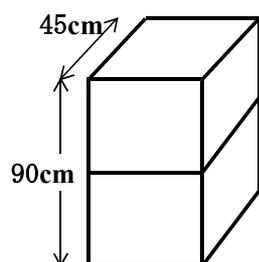
同様に、個人の神殿を作る場合でも、部屋をその都度設定するという手順は不可欠であろう。そのため神殿を構成する機材はなるべく簡素なものが良い。自家用車で運べないような巨大なもの、重いものは不適である。ここに紹介する機材はその観点から考察されている。当然ながら、《黄金の夜明け》団の定置式の大型機材とは違う。《黄金の夜明け》団式の神殿を作りたい方は、ロバート・ウォン著『秘密の聖堂製作法』（サミュエル・ウェイザー社。邦訳「魔女の家BOOKS」）を参照してもらいたい。

祭壇

殆どの魔術結社で2重立法祭壇を用いている。O. T. O. のグノーシス・ミサなどでは、幅広い魔女の祭壇に似たものを用いるが、あれは全裸の女神の尻が乗る場所を確保するためであろう。四大武器を乗せる程度であれば2重立法祭壇で良い。もし、特殊な魔術を行うため戦斧や長槍を象徴武器に使用する場合は、再考する必要がある。

クロウリーは「作業の堅固な基盤たる魔術師の不動の意志と、その作業を行う際の法則を表象する」とし、多彩な象徴の描き込まれたジョン・ディーの祭壇を紹介している。ここに紹介するのは、《黄金の夜明け》団が用いていた「香祭壇」のヴァリエーションである。

←45cm→



材 料：1 c m厚程度の合板

色指定：上 板 一 白

前側面（西面）一黒（上）董（下）

右側面（南面）一青（上）エメラルド（下）

左側面（北面）一緋赤（上）オレンジ（下）

背側面（東面）一灰色（上）黄（下）

底 板 一 黄（東）小豆色（南）オリーブ（西）黒（北）

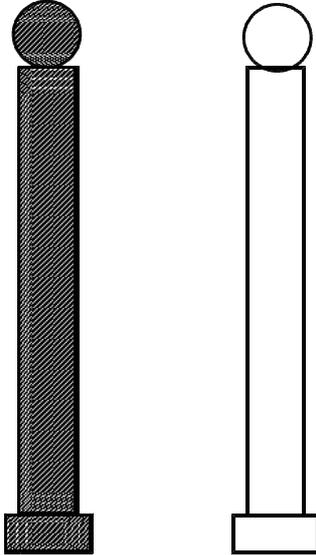
または、黄（東）赤（南）青（西）緑（北）

合板はどう組み合わせても良いが、継ぎ目はパテ等で埋め、木目が出ないように下塗りをしてから発色のよい塗料で塗り分けること。その色のカラーボードがあれば、上から切り張りしても良いだろう。

この祭壇には白い（または黒い）祭壇覆いをかけて使用する。祭壇を置く方位は厳密に設定すること、通常は儀式上の中央に指定された色を四方位に合致させて置く。底辺の四つの三角形は、四大を制御する携帯用魔法円の機能も果たす。

柱

2本の柱、ヤキンとボアズは、大規模な儀式場には不可欠である。それは宇宙のふたつの極性を表す。当然、生命の木の左右の柱の象徴でもある。従って、この柱の間に立つということは極性の均衡を意味し、中央の柱に示される径を進むという意志表示にもなる。



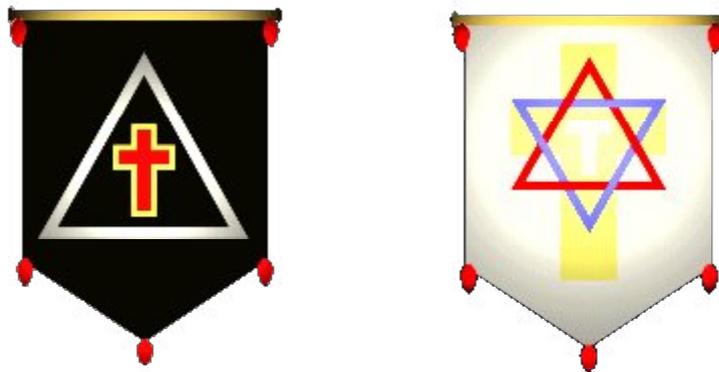
柱の素材は非常に難しい。極端に重くなければ丸太を用いても良いし、当然プラスチックやその他の合成建材でも差し支えない。可能ならば、軽くて強靱な素材が良い。神殿を設定するとき何度も動かしたりするが、運搬する機材のなかでは最も大物だからだ。電信柱で作った儀式柱をトラックで運ぶ様子を想像して頂きたい。

そのためサイズは漠然としか指定できない。儀式場に搬入できる大きさで、当然のことだが、儀式場の天井より短く。しかも、儀式に参列する魔術師たちよりも高いもの。この程度で類推してください。

右の柱は白く、または銀色に塗る。左の柱は黒く塗る。柱にはその直立を確かなものにするため土台をつける。取り外し可能なら運搬が便利だろう。柱の先端には、飾りが必要だ。《黄金の夜明け》団では、左右で方向の逆な三角錐を据えて、上向きと下向きの三角形、上昇原理と下降原理、両者を融合させた場合、ダビデの星が生じることを象徴させた。しかし、この場合、そこまで凝ることはない。適当なボールを据えておけば良い。

四大旗

「黄金の夜明け」団の神殿に用いられた「東旗」及び「西旗」は下図のとおり。I ∴ O ∴ S ∴ の神殿ではこれらと異なる旗が用いられる。



神殿には四大の性質を表象する旗を作成して、東西南北の対応する方位に架けておくのである。これによって儀式場の境界線が決定される。旗に描き込む象徴は、四大の三角記号、獣帯の該当するサイン等である。色は特に指定しない。旗は無地の白、記号は黒の方が大きな儀式場では映える。

I.:O.:S.:の四大旗

風旗(東旗)



図像部:黄
円環部:黄
像背景:紫
主文字:紫
旗生地:白

火旗(南旗)



図像部:赤
円環部:赤
像背景:緑
主文字:緑
旗生地:白

水旗(西旗)



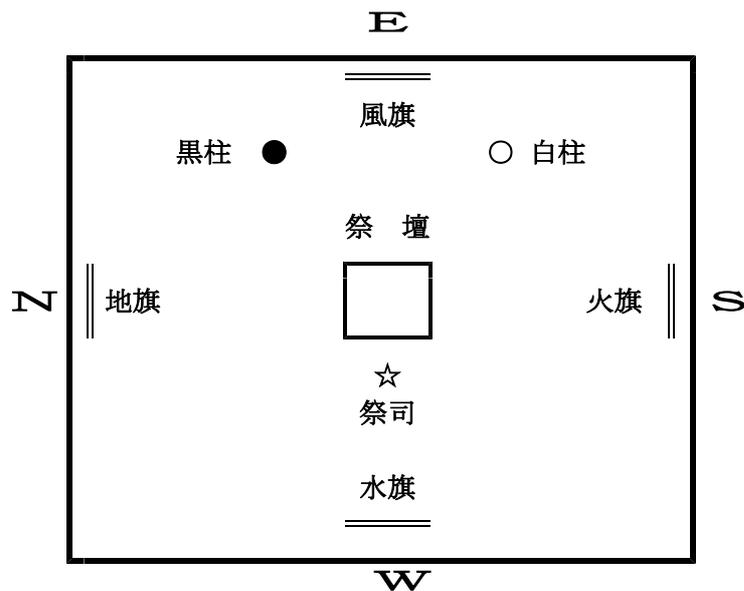
図像部:青
円環部:青
像背景:橙
主文字:橙
旗生地:白

地旗(北旗)



図像部:黒
円環部:黒
像背景:白
主文字:白
旗生地:白

儀式場の設定



これまで述べたのは、複数の人間が集まる場合の儀式場をどうするか、という問題であった。基本的には、自分ひとりしか用いない神殿でも、集団儀式の神殿と同じく厳密に作っても構わない。いずれその神殿で、他の仲間も加えた儀式をやるはずだからだ。しかし、大規模な設備をひとりで作る余裕がないときはどうするか。

そのために当座の簡易版の神殿を紹介しよう。

問題は、どこまで簡素化できるかである。

《祭壇》は不可欠だ。これなくしては儀式の座標が定まらない。しかし、厳密な2重立法祭壇を自作する必要はない。家具屋にある脇机を買ってきて、祭壇覆いをかければ良い。ただし、祭壇本体のごてごてした装飾が見えてはいけけない。シンプルなものを使うか、それを隠す大きな覆いを準備するしかないだろう。

《柱》は必ずしも必要ではない。自作できなければ省略しても良い。

《四大旗》は、次の四角の紙を壁に貼ることで代用できる。

- 東—紫地に黄色の宝瓶宮サイン
- 南—緑地に赤色の獅子宮サイン
- 西—オレンジ地に青の天蠍宮サイン
- 北—白地に黒色の金牛宮サイン

さて、これで一応の整理はついた。個人神殿の方位象徴を次にまとめてみよう。

方位	東	南	西	北	上	中央	下
元素	風	火	水	地	絶対者	人間	生命
象徴	短剣	棒	盃	星形	王冠	星	立方体
季節	春	夏	秋	冬	—	—	—
時間	夜明け	正午	日暮れ	深夜	未来	現在	過去
タロー	剣	棒	盃	星形	灯ルナ	絵札	数札
母音	E	I	O	A	W	U	Y
原理	生	光	愛	法	増大	中立	減少
大天使	ラファエル	ミカエル	ガブリエル	アウリエル	メトロン	スピリエル	サングラフォン
色	黄	赤	青	緑	紫外線	可視光線	赤外線
文字	ヨド	ヴァウ	ヘー	ヘー	アレフ	メム	タウ

最後に実務的な話をもう少し加えておく。神殿を設定する場所は、できる限り静かな場所が良い。もし、選択の余地がない場合は、部屋の扉と窓を内鍵をかけて閉じてしまう。夏場は窓を開けてもよいが、それ以外の季節は外部と完全に遮断されるのが理想だ。また、部屋に電話がある場合は、コードごと引き抜いておく。家族に部屋に入らないよう頼んでおくのも必要だ。

さて、次に部屋のなかをクリアにする。家具は総て運び出すのが、理想である。しかし、運び出せない大物は最低限、壁際に寄せて、部屋の中央を空にする。壁に寄せた家具が目障りなら、

上からカーテンや無地のシーツをかぶせて壁の一部にしてしまう。

その上で徹底的に掃除する。特に髪の毛や、爪の切り屑などがないように念入りに床を掃除する。かつて人体の一部であったものは予期しない結果を招くことが多い。木製の床が理想だが、畳の部屋という可能性もある。そのときは掃除した後で、専用のカーペットを敷くと良い。カーペットの色は中間色の無地か、可能なれば白黒のチェック模様が理想的だ。無関係な模様が入った絨毯は適当ではない。状況により四大の色に塗り分けた円形のマットを使うこともある。

冬季は室内に暖房器具が必要である。床暖房やエアコンがあれば言うことはない。しかし、ストーブを入れる必要がある場合は、オイルヒータかパネルヒータをお勧めする。古い直立灯油ストーブは最悪の選択だ。ひらひらした法衣をまとい室内を動き回る様子を想像していただきたい。ペンキを塗った祭壇や、すぐ火のつく旗などが室内に溢れているのである。

7 個人的神殿の聖別法

神殿を設定した場合は、それを聖別しなくてはならない。

《黄金の夜明け》団の場合、「水で浄化し、火で聖別し、…」の例の儀式を執行した。それは最初の聖別であり、もし、儀式場が専用の部屋で、それ以外の目的に使用されないのであれば2度と行う必要はない。次からは通常の設定を行い、開場儀式のなかで聖別を行えば良いからだ。しかし、われわれの直面する方法では、その都度、聖別をするつもりでいた方が良いでしょう。ただし、同じ部屋を繰り返し使う場合は簡略化しても良い。その場合、次の「開場の儀式」は一度だけ行う。この作業はすべて本人が行う。

準備は「聖別儀式」と同様であるが、部屋の四方位及び祭壇に色つきの蠟燭を置く。

東に黄色、南に赤色、西に青色、北に緑色（または、黒色）、祭壇に白色の蠟燭を置き、それぞれの横に火のついた線香を立てる。祭壇には、さらに薔薇、香炉、水の入った皿、塩の入った皿を対応する方位に置く。⁽²⁶⁾もし、祭壇における連禱が暗記できなければ綺麗な厚紙に手書きで書きうつした写板を置き、それを読んでも構わない。

右手に魔術剣をもつ。魔術剣がない場合は短剣（風の短剣以外の）でも良い。

祭壇の西に行き、宣言する。

「*Ab initio cum no esset ulla res erat penitus nisi nomen dei et sapientia eius.*
(初めに、無もなかりき、神の御名と叡智のほかは何もなし。)」⁽²⁷⁾

◎ カバラ十字

◎ 小五芒星の追儼儀式

◎ カバラ十字

◎ 四門の解放

祭壇から薔薇を取り、東に行く。魔術剣で風の召喚の五芒星を描く。

「*Flatus ad orientem versus.* (風は東方に)」

五芒星の中心に宝瓶宮のサインを描く。

「*Erat lux vera, quae illuminat omnem hominem venientem in hunc mundum.*

(すべての人を照らす真の光は、この世に来つつあった)」

もう一方の手で薔薇を前方に3度突き出す。

「*Fiat firmamentum per Elohim.* (エロヒムによりて、支えあれ)

Porta orientem, patere. (東の門よ、開け)」

薔薇を蠟燭の前に置き、線香を取り、東の蠟燭に火を点す。線香を置く。

祭壇から香炉を取り、南に行く。魔術剣で火の召喚の五芒星を描く。

「*Ignis ad austrem versus.* (火は南方に)」

五芒星の中心に獅子宮のサインを描く。

「*Accendat in nobis, Dominus, ignem sui amoris et flammam aeternae caritatis.*

(主は、われらの心に、ご自分の愛の火と永遠の愛徳の炎を燃やし給わんことを)」

もう一方の手で香炉を前方に突き出し、3度振り込む。

(26) 色つきの蠟燭などは、キリスト教聖具店や、ニューエイジ系の店などで入手できる。

(27) Johann Reuchlin, *De Arte Cabalistica On the Art of the Kabbalah*, Nebraska : University of Nebraska Press, 1993, pp.250, 253.

「**Fiat iudicium per ignem.** (火によりて、裁かれてあれ)

Porta austrem, patere. (南の門よ、開け)」

香炉を蠟燭の前に置き、線香を取り、南の蠟燭に火を点す。線香を置く。

祭壇から水皿を取り、西に行く。魔術剣で水の召喚の五芒星を描く。

「**Aqua ad occidentem versus.** (水は西方に)」

五芒星の中心に天蠍宮のサインを描く。

「**Asperges me, Dominus, hyssopo, et mundabor; lavabis me, et super nivem dealbabor.**

(主よ、ヒソップもて我が身に振り撒き、この身を浄化せん。我が身を洗い、さすれば雪よりも白くならん)」

もう一方の手で水皿を前方に突き出し、指を浸して3度振る。

「**Fluat odor per spiritum Elohim.** (エロヒムの霊によりて、流れ潤せ)

Porta occidentem, patere. (西の門よ、開け)」

水皿を蠟燭の前に置き、線香を取り、西の蠟燭に火を点す。線香を置く。

祭壇から塩皿を取り、北に行く。魔術剣で地の召喚の五芒星を描く。

「**Terra ad septentrionem versus.** (地は北方に)」

五芒星の中心に金牛宮のサインを描く。

「**Et qui in ligno vincebat, in ligno quoque vinceretur.** (木に勝った者が、木により敗られる)」

もう一方の手で塩の入った皿を前方に突き出し、ひとつかみの塩を3度撒く。

「**Maneat terra per Adam.** (アダムによりて、地を保て)

Porta septentrionem, patere. (北の門よ、開け)」

塩皿を蠟燭の前に置き、線香を取り、北の蠟燭に火を点す。線香を置く。

祭壇の西に行き東面する。魔術剣を立て、最後の「闇」の部分で落とす。

「**O caput mortuum impero tibi per vivium Serpentem.**

(おお、汝は、生ける蛇によりて、死せる体を支配す)

Kerub impero tibi per Adam.

(汝は、アダムによりて、ケルブを支配す)

Aquila impero tibi per alas Tauri.

(汝は、牡牛の翼によりて、北を支配す)

Serpens impero tibi per Angelum et Leonem.

(汝は、天使と獅子によりて、蛇を支配す)

Quattuor Portae, patemini in nomine Dominus Luce et Tenebrae.

(光と闇の主の御名において、四門よ、開け)」

祭壇の線香を取り、中央の蠟燭に火を点す。線香を置く。

宣言する。

「**Templum dni, templu dni, templu dni.** (主の神殿よ、主の神殿よ、主の神殿よ)」

可能であれば、蠟燭と線香が燃え尽きるまでそのまま待つ。

それが不適當であれば、鎮火具、または金具を用いて消す。

燃え残りの蠟燭と線香は、後日に火で天に返す。

8 個人的神殿の聖別解除法

物理的の神殿を設定した場所から立ち退く必要があるとき、聖別された場所を通常の状態に復旧させなければならない。しかし、物理的の神殿の外形とその雰囲気（オーラ）を廃棄することは可能であるが、あなたの部屋からアクセスしていた内的の神殿を廃棄することはできない。すなわち、「神殿は人の手で建てるものではなく、永遠に天界にある。」ためである。⁽²⁸⁾

従って、次に別の場所に物理的の神殿を設定するまでの間、不要となった地上とのリンクを切るために行うのが「個人的の神殿の聖別解除」である。

次の「聖別解除儀式」を一度だけ行う。この作業はすべて本人が行う。

準備は「聖別儀式」と同様であるが、部屋の四方位及び祭壇に色つきの蠟燭を置く。

東に黄色、南に赤色、西に青色、北に緑色（または、黒色）、祭壇に白色の蠟燭を置き火を点す。祭壇には、さらに薔薇、香炉、水の入った皿、塩の入った皿を対応する方位に置く。⁽²⁹⁾

もし、祭壇における連禱が暗記できなければ綺麗な厚紙に手書きで書きうつした写板を置き、それを読んでも構わない。

右手に魔術剣、左手に蠟燭を消す鎮火具をもつ。魔術剣がない場合は短剣（風の短剣以外の）でも良い。

祭壇の西に行き、宣言する。

「*Ab initio cum no esset ulla res erat penitus nisi nomen dei et sapientia eius.*
(初めに、無もなかりき、神の御名と叡智のほかは何もなし。)」

◎ カバラ十字

◎ 小五芒星の追禱儀式

◎ カバラ十字

◎ 四門の閉鎖

東に行く。魔術剣で風の追禱の五芒星を描く。

「*Flatus ad orientem versus.* (風は東方に)」

五芒星の中心に宝瓶宮のサインを描く。

「*Erat lux vera, quae illuminat omnem hominem venientem in hunc mundum.*

(すべての人を照らす真の光は、この世に来つつあった)」

もう一方の手で薔薇を前方に3度突き出す。

「*Fiat firmamentum per Elohim.* (エロヒムによりて、支えあれ)

Porta orientem, claudere. (東の門よ、閉じよ)」

鎮火具で東の蠟燭を消す。

南に行く。魔術剣で火の追禱の五芒星を描く。

「*Ignis ad austrem versus.* (火は南方に)」

五芒星の中心に獅子宮のサインを描く。

「*Accendat in nobis, Dominus, ignem sui amoris et flammam aeternae caritatis.*

(主は、われらの心に、ご自分の愛の火と永遠の愛徳の炎を燃やし給わんことを)」

(28) Dolores Ashcroft-Nowicki, *The Ritual Magic Workbook : A Practical Course of Self-Initiation*, Wellington : The Aquarian Press, 1986, pp.243-245.

(29) 鎮火具についても、キリスト教聖具店などで入手可能だが、工具販売の店で安価に入手できる場合もある。工夫してもらいたい。

もう一方の手で香炉を前方に突き出し、3度振り込む。
「**Fiat iudicium per ignem.** (火によりて、裁かれてあれ)
Porta austrem, claudere. (南の門よ、閉じよ)」
鎮火具で南の蠟燭を消す。

西に行く。魔術剣で水の追躰の五芒星を描く。
「**Aqua ad occidentem versus.** (水は西方に)」
五芒星の中心に天蠍宮のサインを描く。
「**Asperges me, Dominus, hyssopo, et mundabor; lavabis me, et super nivem dealabor.**
(主よ、ヒソップもて我が身に振り撒き、この身を浄化せん。我が身を洗い、さすれば雪よりも白くならん)」
もう一方の手で水皿を前方に突き出し、指を浸して3度振る。
「**Fluat odor per spiritum Elohim.** (エロヒムの霊によりて、流れ潤せ)
Porta occidentem, claudere. (西の門よ、閉じよ)」
鎮火具で西の蠟燭を消す。

北に行く。魔術剣で地の追躰の五芒星を描く。
「**Terra ad septentrionem versus.** (地は北方に)」
五芒星の中心に金牛宮のサインを描く。
「**Et qui in ligno vincebat, in ligno quoque vinceretur.** (木に勝った者が、木により敗られる)」
もう一方の手で塩の入った皿を前方に突き出し、ひとつかみの塩を3度撒く。
「**Maneat terra per Adam.** (アダムによりて、地を保て)
Porta septentrionem, claudere. (北の門よ、閉じよ)」
鎮火具で北の蠟燭を消す。

祭壇の西に行き東面する。鎮火具を祭壇に置き、魔術剣を立てて保持する。
魔術剣は、最後の「闇」の部分で落とす。

「**O caput mortuum impero tibi per vivium Serpentem.**
(おお、汝は、生ける蛇によりて、死せる体を支配す)
Kerub impero tibi per Adam.
(汝は、アダムによりて、ケルブを支配す)
Aquila impero tibi per alas Tauri.
(汝は、牡牛の翼によりて、北を支配す)
Serpens impero tibi per Angelum et Leonem.
(汝は、天使と獅子によりて、蛇を支配す)
Quattuor Portae, claudimini in nomine Dominus Luce et Tenebrae.
(光と闇の主の御名において、四門よ、閉じよ)」

宣言する。

「**O altitudo, O profunditas, O nostra infirmitas.**
(大いなる深淵よ、深淵の深みよ、おお、われはかくも萎えたり)」

燃え残りの蠟燭と線香は、後日に火で天に返す。

9 ノタリコン

カバラ数秘術の第2は נוטריקון (ノタリコン) である。

この単語は、ラテン語の NOTARIUS (速記者) から来たと言われている。典型的なノタリコンの例を旧約聖書の記述、מִי יַעֲלֶה לָנוּ הַשְּׁמַיִם (誰が我々のために天に昇る。) (『申命記』 30:12) から紹介する。⁽³⁰⁾

מִי יַעֲלֶה לָנוּ הַשְּׁמַיִם 各単語の最初の文字 → מילה 割礼
מִי יַעֲלֶה לָנוּ הַשְּׁמַיִם 各単語の最後の文字 → יהוה 神名

さて、ノタリコンは、基本的にふたつの技法からなっている。最初の技法は、ひとつの単語を文字に分解して、それぞれの文字を頭文字とする一連の文章を組み立てる技術である。第2の技法は、これとは逆に文章の各語の頭文字を取って単語を作る方法である。

第1の技法をヘブル語で、פתיחה (展開。ヒラキブ) と言う。マサースの紹介している方法でこれを見てみよう。『創世記』の最初の1語は、בראשית (ベレシト) の6文字であるが、これを基に、次の様々な6語の文章が組み立てられる。

ただし、これはキリスト教に改宗したユダヤ人カバリスト、ソロモン・マイア・ベン・モーセによる検討であることを断っておく。

בְּרֵאשִׁית בְּרֵאשִׁית בְּרֵאשִׁית בְּרֵאשִׁית בְּרֵאשִׁית בְּרֵאשִׁית
初めに、エロヒムはイスラエルが律法を受け入れるのを見た。
(ベレシト ラー エロヒム シェクペロ イスラエル トーラー)

בֶּן רִיחַ אֵב שְׁלוֹשָׁתָם בֶּן רִיחַ אֵב שְׁלוֹשָׁתָם בֶּן רִיחַ אֵב שְׁלוֹשָׁתָם
息子、霊、父。汝らはこれらの三位一体を平等に崇めねばならぬ。
(ベン ルアク アブ シャロシエム イェカド タウボド)

בְּכוֹרֵי רֵאשׁוֹנֵי אֲשֶׁר שְׁמוֹ יְשׁוּעַ תְּעִבּוּדוֹ
汝らは我が第1子、長男を崇めねばならぬ。その名はイエスである。
(ベコリ ラシュニ エシエル シェモ ヨシュア タウボド)

בְּכוֹרֵי רֵבֶן אֲשֶׁר שְׁמוֹ יְשׁוּעַ תְּעִבּוּדוֹ
イエスという名の主が来るとき、汝らは崇めねばならぬ。
(ベボア ラバン エシエル シェモ ヨシュア タウボド)

בְּתוּלַת רֵאוּיָה אֲבַחַר שְׁתַּלְּד יְשׁוּעַ תְּאֲשִׁרוּהָ
われはイエスを生むに値する乙女を選ぶであろう。汝らは彼女に祝福を唱えよ。
(ベツル ラヴィア アバカル シェタルド ヨシュア タシエロー)

(30) Donald Tyson, "Practical Kabbalah," in *Three Books of Occult Philosophy*, St.Pual : Llewellyn publications, 1995, p.764.

בעוגת רצפים אסתתר שגופי 'שוע תאכלו

われは自らを炭で焼かれたパンのうちに隠すであろう。汝らはわが身体イエスを食さねばならない (ピアウゴス ラツェピム アシュタトル シェゴピ ヨシュア タクロ)。

さらに、ふたつソロモン以外の BRASH I Th 展開例を示しておこう。

בל רוח אשין שחר ים תכל

主と聖霊は、海の上より世界に挨拶する夜明けの礎を置かれた。
(ベル ルアク アシン シェケル イム テベル)

בראם רחם אור שתיים ילודה תודעה

光の子宮をふたつ、意識の芽生えとして創造された。
(ブラム ラキム オール シャティム イルダー タウドー)

第6のセフィラ、תפארת 「美」(ティファレト)を展開すると次のようになる。

תחייה פעם אלים רבה תחולה

再生においては、心臓の鼓動は神に同調し、力もて甦るとき光輝く。
(タキィアー ポム アリム ティカビラー)

תוכיות פז אסוך רינה תעלומה

総ての内的性質は黄金、音楽の神秘に溢れた盃である。
(トゥキウース パズ アシュク リナー トルマー)

次に『出エジプト記』14:20の記述を見てみよう。「そして来た、エジプト部隊とイスラエル部隊との間に、そこに雲と闇があり夜もすがら、かれこれと近付くことなく、夜が過ぎた」これは、ファラオの軍勢の追撃を妨げた雲の柱に関する描写である。文頭の単語は、ו'כא (そして来た)であり、これを展開することにより意味を補足できる。

וגומר ייחודיות בלעם אלהים

そしてその上に、結果として、排他主義はエロヒムの異邦人を呼んだ。
(ヴェグマル イクディウス ブロム エロヒム)

ובכן יהוה במה אופן

それゆえに主は雲を道筋に放った。
(ヴェブカン ヤーウェ ビマー アופן)

ועד ירד ברא אלוהי

神聖のなかに集会が来たり、創造された。
(ヴォド イラド バーラー アルヴィ)

さて、ノタリコンの第2の技法は、בְּקִיצוֹר (要約。ビクィツアル) と言う。最初は、同じくマサースの例を見てみよう。

סְתֵרָה] אֶכְמָא (秘密の知恵。コクマー ネセスラ) から、יָן (かすがい。チェン) が得られる。

אֶרְרַט אֶרִי (アララト山。ヘリ アララト) → אָה (見よ。ハー)

שׁוֹפֵר קוֹל (トランペットの声。コル ショファル) → שָׁק (集合。ケシュ)

直ぐに理解できることだが、どんな文章からも要約によって意味のある単語ができる訳ではない。そのため要約した文字を並び変えるなどの技巧が凝らされた。

אֱלֹהִים רִוַח (ルアク エロヒム) から אָה という文字列が得られるが、これだけでは意味をなさない。それを裏返すと、אָה (光。アル)

מְשׁוֹשׁ כָּל הָאָרֶץ (あまねく大地の喜び。メシャヴェス ケル ハアレツ)
→ מְכָה → כְּמָה (暖かい。ケマー)

有名な魔術の単語アラリタは、16世紀のキリスト教カバリストであるヨハン・ロイヒリンの解説によれば、次の文章の要約となる。⁽³¹⁾ ほぼ、同時期にコルネリウス・アグリッパも同じヘブル語の文章を紹介していることから、これが当時の定説であったと解釈できる。⁽³²⁾

אֶחָד רֵאשׁ אֶחָדוֹתוֹ רֵאשׁ יְיָ חוּדוֹ תְּמוּרָתוֹ אֶחָד
(1はその始まり。1はその個性。その順列は1なり) → אֶרְאִיתָא

ゴドウィンは別の綴りを紹介している。⁽³³⁾

אֶחָד רֵאשׁ אֶחָדוֹתוֹ רֵאשׁ יְיָ חוּדוֹ תְּמוּרָהוֹ אֶחָד

要約の技法の別法として、各単語の最後の文字を用いて要約する場合や、中間の文字を用いる場合などがある。

最後の文字を用いる例を示す。

אֱלֹהִים וְיֵאמֶר (そしてエロヒムは語れり。ヴィアマル エロヒム) 『創世記』 1:3
→ אָה (高い。レム)

הָרַם טוֹב (良き山。ハル ティベブ) 『出エジプト記』 3:25
→ אָה (努力すること。ラブ)

(31) Johann Reuchlin, *De Arte Cabalistica On the Art of the Kabbalah*, Nebraska : University of Nebraska Press, 1983, p.348, 351.

(32) Cornelius Agrippa, *De Occulta Philosophia Libri tres*, Leiden : E.J.Brill, 1992, Cap.XI Liber Tertius, p.428.

(33) David Godwin, *Godwin's Cabalistic Encyclopedia*, St.paul : Llewellyn Publications, 1994, p.7.

中間の文字を用いれば、

ן דסבין סבא (古きもののなかの古きもの。シバ ダスビン)
→ כב (静脈。ベブ)

ר שפת ש (虚言癖の唇。シェペス シクル)
→ פר (つまずきの石。パク)

中間の文字を使う場合、上記の例のように奇数の文字でできた単語は良いが、偶数の文字でできた単語は中心がない。その場合は、中心を挟む前後の文字を使う。

ם ימי טבעת (第7の日。シェボース イマイム)
→ טבעת כי (我とともに集い。オム ビー)

さらに、各語の最初と最後の文字を取ると、

ה לידה חבלי (陣痛。カブリ リダー)
→ חילה לחיה (強く生きる。リカイヤー)

先に述べた『出エジプト記』14:20 の文章を用いて要約のおさらいを行う。

ויבא בין מחנה מצרים ובין מחנה ישראל ויהי הענן
והחשך ויאר אתהלילה ולאקרב זה אלזה בלהלילה

(そして来た、エジプト部隊とイスラエル部隊との間に、そこに雲と闇があり夜もすがら、かれこれと近付くことなく、夜が過ぎた)

これの頭文字を取ると、 ובממוי והוואוואב である。

これを次のグループに分ける。 ובממוי והו ואוואב

ובממוי → מו מבוים (確かな足場。メヴ メヴァビム)
והו → הוו (結びつけること。ヒヴァブ)
ואו → או (どちらかを。オー)
באו → או זב (流れ、もしくは。ゼブ オー)
→ או זב (父、もしくはこの。アブ ゴー)

これを総合すると、「流れ、もしくは何かのどちらかを結び付ける確かな足場」または、「父、もしくはこれのどちらかを結び付ける確かな足場」となる。

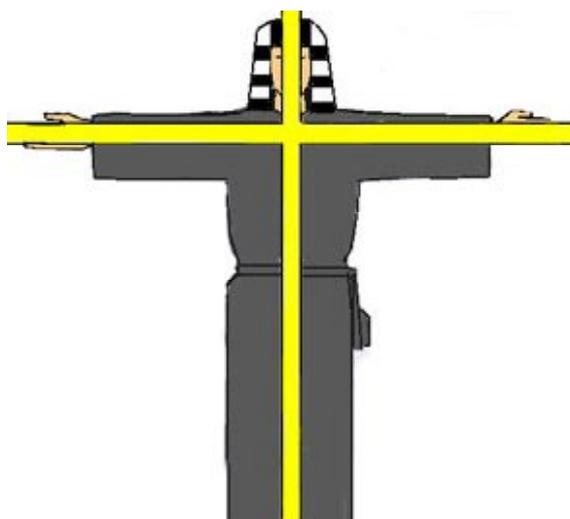
ノタリコンの練習のためには、『旧約聖書』をテキストに用いると良い。適当な単語を選んで、展開し、または文章を要約する。この練習を続けるとゲマトリアのときと同様に、飛躍的にヘブル語の力が増大する。ゲマトリアでは、おそらくヘブル語の文字と数値を覚える程度だったが、ノタリコンの練習では辞書を頻繁に引かねばならない。その効果は絶大なものがある。

第6ヶ月目の瞑想

課題瞑想：薔薇と十字架

今月の瞑想は、開始する前と終わった後に、必ずヘブル語でカバラ十字を唱えよ。これから、あなたが行う瞑想は、身体的なエネルギーの回流を伴う。それは、קַבְרֵי קַבְרֵי (神秘の薔薇。ショウシャン ソダース) と呼ばれる秘教的力を身体に喚起する技法である。その骨子は既に、カバラ十字の項で学んでいるが、ここではさらに深く進んでみよう。

第1週は、次の手順で瞑想を行う。カバラ十字を切る。室内の照明を暗くし、できれば自分の背後から弱い光が照らすようにして、慣れた椅子に座り、瞑想の姿勢を取る。このとき室内を完全な暗闇にはしてはいけない。前方に、小五芒星の儀式の応用で学んだ、自分自身の思念体を作る。強い想像力で、こちらを向いて足を揃えて立ち、両腕を左右に広げて、あたかも十字架を模したような自分の姿を形成する。そのとき実際に何を着ていようと、目の前に形成する自己の思念像は、黒い法衣を纏い白黒の縞の入ったネミスを被った魔術儀式に臨む姿でイメージする。小五芒星儀式の応用、集中の訓練との差異は、意念を目の前の立ち姿に移さないことだ。そして、十分な姿にイメージが固定したら、カバラ十字を切るときの要領で、ただし思念体の身体は動かさずに、その上に光の十字を通す。



伸ばした右手の先から、つまり、あなたから見て左の彼方から直径5センチほどの白輝光の筋が飛来し、思念体の右手から胸の上部を貫き左手を抜け、あなたから見て右側の彼方の宇宙に消え去っていく。次に頭上遙かな宇宙から、同様の光の帯が降りてきて、思念体の頭部から胸、腹、両足の間を貫いて、大地の遙か深みに消える。

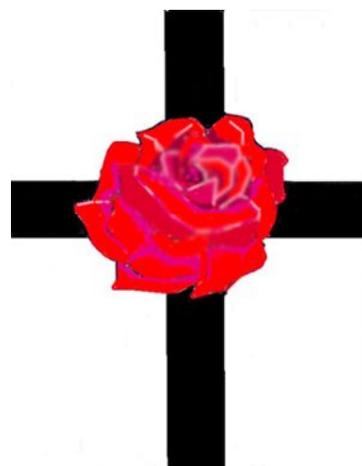
この光の十字架が貫いた後は、人体にほのかな白い光の痕跡が残っている。両手や頭上、足下の空間には光は残留しない。微かな光の十字架は、両手を磔刑の十字架の形に広げた人体を仄かに染めているだけだ。その活性化された人体を、力を感じ取る。全部で約10～20分ほどこの状態を維持して、瞑想する。その後、思念体を消し、カバラ十字を切る。

第2週は、上記の手順を全て踏んだ上に、次を加える。光の十字が形成された後、思念体の胸の上に深紅の薔薇の花を視覚化する。その薔薇は官能的なまでに美しく、かつ孤高の厳しさを放たねばならない。

微速度撮影で薔薇の蕾が開花する様子を視覚化した後、その開き切った薔薇と十字架を維持したまま、瞑想、思念体の消去、カバラ十字を切るという手順は同じ。

第3週は、基本的に同じ手順を踏むが、補色で行う。即ち、白輝光のかわりに黒い炎の帯が飛来し、人体を濃密な暗色の十字架に封印する。胸に咲く薔薇は目も鮮やかなエメラルドを連想する透明で輝く緑色である。その他の手順は全く同じ。

第4週は、極めて困難な作業を行わねばならない。まず、いつも座って瞑想したが、今回は思念体と向かい合わせの十字架を作るように両手を左右に伸ばし、立つ。思念体に対しては、第3週に行っ



たと同じ、黒い炎とエメラルドの薔薇を形成するが、同時に自分自身にも、同じ十字架を白輝光と真紅の薔薇で形成する。それは、全く対称の動作である。思念体に最初の黒い炎が左側（思念体の右手）に飛んでくるときは、自分の右側からも、白い炎が飛んでくる。十字架を形成すると、同時にエメラルドとルビーの薔薇が咲く。できる限り強く、体面する二人のあなたをイメージせよ。

各週の瞑想の終わりに、思念体を消すときは、その姿が近づき、あなたの胸の中心部、一番下側の肋骨の中心のすぐ下に吸収されていく様子をイメージする。

そのとき、あなたは自分と同質のエネルギーが、薔薇十字の瞑想で浄化され、増幅されて、帰ってくるのを肉体に感じ取りなさい。PER CRUCEM AD ROSAM 「十字架を経て薔薇へ」という格言の真の意味が感得されるだろう。

今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。

1 必読図書

今月の学習の参考となる著作は、多々あるが特定の著作は指定しない。

2 推薦図書

今月の学習の参考になる書籍は、以下のとおりである。ミルトスの対訳本は順次、翻訳刊行されているので、自分の好きな巻を選んでノタリコンなどの学習に使用すると良いだろう。

関谷定夫著 『図説：旧約聖書の考古学』 ヨルダン社、1979年。

ヘブライ語聖書対訳シリーズ 『創世記 I』 ミルトス・ヘブライ文化研究所編、1990年。

Kearton, Michael. *The Magical Temple*. Wellingborough : The Aquarian Press, 1980.

Gray, Wm.G. *Temple Magic*. St.Paul : Llewellyn Publications, 1988.

(ケアトンの著作はレアものですが、グレイの著作は比較的入手が容易です。)

第6ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 あなたが従来、持っていた神殿のイメージを述べなさい。
- 2 ソロモン神殿の魔術的意味について述べなさい。
- 3 メイソンの神殿は極めて錯綜しているが、現代の魔術結社の神殿は単純な構造である。その理由として推察されることを述べなさい。
- 4 アストラル神殿として、カバラ的なモデルを示したが、それ以外のアストラル神殿のモデルを簡単に描写しなさい。
- 5 神殿作業として魔術を行う場合、黄金の夜明け団の団員たちは何に注意したか。
- 6 個人的神殿として何を作成したか。一部でも作成したものは、その状況を述べなさい。
- 7 その個人的神殿は聖別したか。聖別した場合、その成果をどのように感じたか。
- 8 次のヘブル語の文章をノタリコンの技法を用いて、意味ある単語に「要約」しなさい。
וַיִּאמֶר אֱלֹהִים הָאֵר אֶהְיֶה וְאֶהְיֶה וְאֶהְיֶה (そしてエロヒムは言われた、光あれ) 『創世記』 1:3